つぶやき124

博多とアジアの映画(114)

松浦　仁

1985(昭和60)年、ワーナー・ブラザースとゴールデン・ハーベストが製作したアメリカと香港の合作映画「プロテクター」が公開された。主演はジャッキー・チェンで、アメリカ・ハリウッド進出を果たした「バトルクリーク・ブロー」(1980、本誌「博多とアジアの映画(93)」参照)に続く、ハリウッド映画主演作目だった。監督はニューヨーク出身のジェームズ・グリッケンハウスだったが、グリッケンハウスの演出に納得できなかったジャッキー・チェンは自ら監督して改訂版を製作した。そして欧米圏ではジェームズ・グリッケンハウス監督作品、アジア圏ではジャッキー・チェンが撮りなおした改訂版が公開された。

当然、アジア圏に位置する日本ではジャッキー・チェン監督の改訂版が公開された。東宝東和が配給して、6月22日から全国の東宝系映画館で初公開されたのだが、どういう事情なのか香港では1ヵ月後の7月、アメリカでは2ヵ月後の8月に公開されたので、世界に先駆けての日本公開だった。福岡ではシネマ1で6月22日から8月2日まで上映され、東宝直営館ではないがニュー大洋でも6月22日から7月5日まで上映された。併映作品は全国と同じ「ペンギンメモリー 幸福物語」だった。

「ペンギンメモリー 幸福物語」(1985)は日本のアニメーション映画で、製作に至った経緯がかなり異色だった。そのきっかけになったのが1983(昭和58)年に放送されたサントリーCANビールのテレビCMだった。静かなバーでスローテンポのジャズを歌うペンギンの女性シンガーの姿を見て、1人でビールを飲んでいたペンギンの男性客が感極まって涙を流した後、所ジョージの「泣かせる味じゃん」というナレーションで終わるというペンギンの世界を描いたアニメーションだった。

イメージキャラクターとして登場した愛らしいペンギンとペンギンが歌っていた曲が当時トップアイドルだった松田聖子14枚目のシングル「ガラスの林檎」のB面に収められていた「SWEET MEMORIES」だったことと相まって話題になった。CMはシリーズ化され、「SWEET MEMORIES」もヒットしたことから、サントリーはペンギンの世界をうつした上映時間101分の長編アニメーションをCMでアニメを担当していたCMランドのスタッフに依頼して製作したのだった。

1984(昭和59)年に東映パラスで上映された「五福星」と「キン肉マン」の併映から、またしてもジャッキー・チェン主演のアクション映画とアニメーションの取り合わせだが、もし現代において映画館で2本立てというプログラムがあるなら、明らかに「プロテクター」と「ペンギンメモリー 幸福物語」はミスマッチだろう。しかし、当時の観客はなんの違和感もなくこの2本を楽しめたのなら、それは昭和の映画館事情あるいは世相を反映していて興味深い。

「プロテクター」は志免映劇で9月21日から28日まで「テラ戦士Ψ BOY」との2本立てで上映された。「テラ戦士Ψ BOY」は1985(昭和60)年7月に全国の東映系映画館で公開された、超能力を身につけた少女が同じようにエスパーとなった少年たちと宇宙からやってきた謎の生命体〈BOY〉を救う日本のSFファンタジー映画で、当時人気絶頂のアイドル菊池桃子の「パンツの穴」(1984)に続く主演2作目だった。

さらに、「プロテクター」は東映パラスでも11月9日から上映された。(最終日は不明)「ランボー 怒りの脱出」との2本立てだった。「ランボー 怒りの脱出」は1982年に製作されたシルベスター・スタローン主演のアメリカのアクション映画「ランボー」の続編だった。「ランボー」は社会から孤立したベトナム帰還兵ランボーと、たまたま街を訪れた流れ者というだけでランボーを排除しようとした保安官との闘いやランボー自身の独白を通して、ベトナム戦争によって負ったアメリカの傷が描かれていた。

「ランボー」はランボーが警官を相手

に闘った後に投降するシーンで終わるのだが、その続編である「ランボー 怒りの脱出」は服役中のランボーの前に前作に続いて登場するかつての上官トラウトマン大佐が現れ、恩赦と引き換えにベトナムの捕虜収容所に調査のために潜入し、アメリカ人捕虜の写真を撮影してくるという極秘任務の話を持ちかける場面から始まる。東西の人気アクションスターであるシルベスター・スタローンとジャッキー・チェンの主演作である「ランボー 怒りの脱出」と「プロテクター」の2本立ては見ごたえのあるプログラムだっただろう。

そしてこの年、「プロテクター」に続くジャッキー・チェン主演作「ファースト・ミッション」が日本でも公開された。「ファースト・ミッション」は、1985年に製作されたサモ・ハン・キーボー監督の香港映画で、原題は「龍的心」「英題は「Heart of Dragon」だった。主演ジャッキー・チェン、監督(共演)サモ・ハン・キーボー、武術指導ユン・ピョウという当時の香港映画界最高の布陣で製作された。

『両親を早くに亡くし、2人きりで育ったタク(サモ・ハン・キーボー)とヤン(ジャッキー・チェン)の兄弟。特殊警察の刑事になりたての弟ヤンは、犯罪シンジケートの壊滅という初任務に苦労しながらも、知的障害を抱えた兄タクを常に気遣っていた。そんなある日、遊び仲間の悪ガキとギャングごっこをしていたタクは、思わぬ誤解からシンジケートの一員が持ち逃げした宝石を手にしてしまう。やがてタクが宝石を隠したことを知った組織は、タクを捕らえ、人質にしてしまうのだが……。』

監督のサモ・ハン・キーボーは、この映画を従来の派手なアクション映画ではなく、格闘シーンをおさえて、障害のある兄と兄を気遣う弟の兄弟愛と絆を重点においたヒューマン・ドラマとして製作した。ところが、製作費を一部出資している松竹は日本版に病院と駐車場での格闘シーンを追加して、日本のジャッキー・チェンのファンが期待する痛快アクション映画として公開した。さらに、オープニングではジャッキー・チェンが日本語で歌う「CHAINA BLUE」(作詞今野雄二、作曲高中正義)、エンディングでは「TOKYO SATURDAY NIGHT」(作詞作曲美樹克彦)が流れる。

「ファースト・ミッション」は香港よりも1カ月早い9月14日から全国の松竹系映画館で公開された。福岡では、福岡松竹で9月14日から10月25日まで「キッズ」との2本立てで上映された。「キッズ」は、1985(昭和60)年松竹富士が製作した、早見優初主演のアイドル映画だった。横須賀米軍基地周辺を舞台に若い男女の恋と二人が裏の世界の人間と関わることで危険な事態へと展開して行くハードボイルド(暴力的、反道徳的)な映画だった。早見優はこの映画で日本アカデミー賞新人俳優賞にノミネートされたが、圧倒的な存在感があったのは共演の佐藤浩市だった。

「キッズ」は、引き続いて二日市シネマで10月30日か11月8日まで、筑紫映劇で11月2日から11月22日まで上映された。筑紫映劇では「テラ戦士Ψ BOY」との3本立てだった。

さらに、ジャッキー・チェン主演映画は年末にもう1本公開された。香港映画「ポリス・ストーリー 香港国際警察」(1985)で、ジャッキー・チェンは主演だけでなく、監督・脚本、武術指導を兼ねていた。

『香港警察のチェン・カクー刑事(ジャッキー・チェン)は香港最大の麻薬組織を摘発するため山奥のスラム街で張り込み、チュウの女秘書サリナを逮捕するが、その隙にチュウに逃げられてしまった。チェン刑事は、チュウ一味に乗っ取られた路線バスを必死に追いかけ、何とかチュウも逮捕することに成功した。ところが、サリナが検察側証人になるという司法取引が結ばれて釈放される。チェン刑事は、サリナの身辺警護を命じられ、出廷を妨害しようとするチュウの部下たちと激しい闘いを繰り広げることとなる…。』次号に続く

＝図版は、「ファースト・ミッション」＝